

■ 報告 ■

今回の報告会、遅れてすみませんでした。

今、楮の収穫、蒸剥ぎが一番忙しい時で、毎年毎年、「ようやらんだったき、助けてくれんか」という声がある所には、私のところでレジデンスしているアーティストたち、ボランティアさん、地域の人を連れて行って、蒸剥ぎに参加しているのですが、今回は 95 歳の仁淀川町の楮農家さんが「もう、ようやらんだった」ということで 12 人くらいを仁淀川町の山奥へ連れて行って、楮の蒸剥ぎをしてまいりました。

Washi+は、私、浜田あゆみが立ち上げたアートプロジェクトです。鹿敷製紙という町の町にあります紙会社で生まれ、和紙を何とか皆さんに知っていただくために、アートプロジェクトをずっと行っています。今回、助成金をいただいて「Washi+10 周年活動記念事業」をさせていただきました。毎年毎年厳しいことも辛いこともたくさんある中で、申請をした時には、これが受け入れられなかったら今後のことを改めて考えようと思っていたら、後押しをしていただいたような気持ちで、とても嬉しく頑張らせていただきました。

いの町紙の博物館で実施し、この 2,000 人という数は紙の博物館ではレアなのですが、この期間がちょうど県内の 4 年生が紙の博物館にバスで乗りつけて行って、紙の博物館をまわるということがあるので、この時期が一番多いのですが、その時期に合わせて開催させていただきました。2 階の小さな部屋での事業だったのですが、3 階では我々がまた別で WASHI PARK という子どもたちが和紙でとにかく元気いっぱい遊べるという空間を作っていたので、それと合わせて会場の皆さんには和紙について知っていただく機会を設けました。なので、とても多くの人に観ていただくことになりました。

我々は舞台芸術を専門としておりますので、なかなか展示というものが専門ではないのですが、助成金の力を使いまして、いの町にお住まいの美術家さんたちの「見える工房」さんに依頼して、このようにプロフェッショナルな展示をすることが出来ました。最後の日にはミニパフォーマンスを会場で行い、私と山本香菜子という高知在住のダンサーが、Washi+が始まって一年目にそれぞれソロ作品を作ったんですけれども、その公演を再度 10 周年記念にやってみました。

別室では特別上映会を何回か週末に行いまして、簀桁職人の山本忠義さん、この方 3 年前にお亡くなりになりましたけれども、その方を知っていただくためのアーカイブ上映会ですとか、製造過程を用具職人継承会が撮っていましたので、それを上映させていただくという、Washi+10 周年記念だから私たちの活動だけを知ってもらうというわけではなく、楮農家さん、紙漉き職人さん、用具職人さん、いろんな方のお陰様でこのようにやってこれたので、その方たちを知ってもらうのがメインで記念事業を行いました。

記念事業と別に、10 周年やってきて、どのくらい価値があったのかといつも不安に思うのですが、先日カナダのアーティストたちが吾北の農家さんを訪れた際に、「本当はいつでも辞めようと思いつたけど、あゆみさんが一生懸命舞台もやるろう。アーティストとか若い人を我々のところに連れて来てくれるろう、ほんで、今でも続けゆうがよ」と言ってくれて、それがとっても心に温まる出来事でした。

■視察委員の意見・質問■

存続の危機にある土佐和紙について、そこに関わる人々の紹介や、和紙の魅力を広める活動を10年間も継続されたことに敬服します。演劇・ダンス・アートイベントと、和紙の魅力発信の工夫も素晴らしい。この展示を見ると、和紙の制作には、山奥で原材料を育てて、寒い中、蒸し剥ぎをして漉いて・・・実に多くの方々の力が必要だということがわかります。和紙は高知県が誇る文化。今、紙は使い捨てのように扱われることが多くなっていますが、制作のこの過程や、美しく味わいのある土佐和紙の魅力を思えば、売価が高いなんて言われません。今回の展示を見た人は、和紙を見て、地域のコミュニティや自然の大切さにも思いが及ぶことでしょう。この素晴らしい伝統を次世代に繋ぐよう、頑張ってください。(北村真実委員)

■会場からの意見■

●地域の方に、浜田あゆみさんがどれだけ貢献をして可愛がられて和紙を大切にしておられるのかを目の当たりにし、このような若い人が伊野の土佐和紙を支えているんだなということを実感しました。本当に、このアーカイブというのは高知県の宝だと思いました。どういう風に携わられている職人さんが、どんな想いで、どういう工程でなさっているのかが本当に詳しく、付け足しの出来ない映像です。是非これからも大切にしていっていただきたいと思います。